

映画・その色彩が及ぼす心理的影響

大阪芸術大学短期大学部 メディア芸術学科 教授 三原光尋

近年、映画創成期に制作された白黒映画を最新のデジタル技術を駆使して色彩を施し、カラー映画として再構築する試みを、幾度となく目にするようになってきました。ニュース映画はもとより、ハリウッド映画などにおいても、白黒映像からカラー映像に変換が行われ、そのオリジナル版との印象の違いに、驚きを隠せませんでした。

当時の白黒映像が技術的に劣るというよりも、監督や撮影者は、その白から黒の微妙なコントラストの幅の中に伝えたい意図を表現し、素晴らしい作品群を後世に残したと思います。私見ですが、CMなどで当時の白黒映画の中の女優が、色彩を施されて映し出される姿は、何だか少し恥ずかしそうにも感じられます。

映像技術の進歩とその映像の用いられる多様性を考えた場合、もはやオリジナルはオリジナルの特性から逸脱し、今では新たな“意味”を持ち得た映像コンテンツに変貌を遂げているのではないのでしょうか？インターネットを検索すると、そのように色彩を施すソフトやそれを請け負う会社等が多数現れます。

今回私は、その映像の色彩の変化から起こる“印象”について、映像監督として改めて研究をさせて頂こうと、この課題に取り組ませて頂きました。

作業としては、オリジナル脚本を書き上げ、それを基に幾つかの場所で撮影を行い、編集しては、その完成した一本のオリジナル作品から大胆に色彩を変化させるグレーディング作業（色彩の調整）を行い、更に幾本かを完成させ、その作品を上映しては、そこから受ける心理的“印象”の違いが、作品自体にどのような見え方地として観客に届くのかを、検証してみようと試みました。

5月、脚本執筆に脚本家多和田久美氏に協力を頂き、「歩く人」を書き上げ、撮影場所選定などには戸井英紀氏から助言を頂き、その撮影は映像学科卒業生のカメラマン水本洋平氏にお願いし、出演者には俳優太田美恵氏を配し、9月4日～6日にかけて栃木県的那須フラワーワールドを中心とした撮影を決行しました。今回、那須フラワーワールドをメインのロケ地にしたのは、屋外に咲き誇る様々な花の色彩を画面に取り込めることが理由で、その映る多くの色彩が、画面の色調を変換したときに、どのように変貌を遂げるのか、大いに期待するところもあり、選びました。又、その近郊は、山間部で緑も濃く、その色彩もロケ地として撮影しました。更に屋外における撮影ばかりでなく、室内撮影にも挑みました。部屋の一室に、かすかに射

し込む光を取り込んで。撮影機材は、この研究が当学院の映像を学ぶ学生諸君らの役に立つよう、普段使いのスマートフォン iPhone10 を使用しました。撮影時は、酷暑の中ではありませんでしたが、トラブルなく無事に撮影を行えました。

9月後半から、映像学科卒業生の編集技師浅田菜祐花氏と渡嘉敷海音氏に水本氏指示のもと編集に取り掛かりました。

編集した作品には、3カ所での撮影が収められています。①山間部の森にて『緑溢れる世界で』②那須フラワーワールドにて『色彩溢れる世界で』③ホテルの部屋にて『モノトーンな室内で』。

その三本の作品に、4パターンのグレーディング作業を施しました。①そのままのカラー作品②白黒作品③強烈な色彩を施した作品④映画初期のようなフィルム質感な作品。結果20分の作品が完成しました。

今回、研究の求める意味合いから、音楽や効果音は付けていません。劇中のテロップなども。その追加情報が、映像から受ける印象を変えて伝えてしまうと考えたからです。完成品は単に映像だけです。

作品をDVDディスクに変換し、12月から、研究内容を知らない幾人かに大型テレビモニターで鑑賞して貰いました。鑑賞者選定に関しては、映像の専門的な人材を外しての知人に声掛けしました。

鑑賞後のディスカッションでは、共通する意見が。「画面の色彩が違うだけで、全く作品の持ち味、内容が変わる。特に出演者のイメージが違って感じた」白黒映像は、「お洒落な映像…」「芸術性が溢れていた」。強烈な色彩では「ポップな現代アート」「サイケチック…観ていてイライラする」。フィルムテイストでは「ドラマ性を強く感じた」「ホラー映画見たい！」等と全く同じ映像でも、色彩設計を変えるだけで受け取る意識が違ってくことを参加者含めて私自身も実感することとなりました。

改めて色彩が及ぼす心理的影響の“面白さ”を知り、その重要性を痛感し、この研究経験は、これからの私の創作を、より創造性を高める知識の財産となり得ました。そこにはオリジナル性を尊重しつつ、時代に合った適切な見極めが必要不可欠とも再認識しました。

学生諸君らに、作品創作の一環で示せる実践的な良い教材となり、大いに活用させて頂きます。

当研究に、ご支援頂き有り難うございました。